

総論

民営化とは？市場経済と公共性から考える

1. 市場とは何か－「公・私・民」で考える－

松井 彰彦

2. 公共とは何か－日本の図書館について考える－

根本 彰

ここ数年、公共のものとして管理されてきた市民生活に必要なものを、民間企業が管理してもよいとする「民営化」が急速に進んでいる。戦後、日本では国営であった事業の多くが民間企業へと移行した。1980 年代の日本電信電話公社が NTT グループへ、日本国有鉄道が JR グループへ、2005 年の郵政民営化などは報道もある程度なされていたこともありご存知の方も多いただろう。

しかし近年は、ほとんど報道もなく法律が改定されているケースが多い。たとえば、2018 年 4 月に「主要農産物種子法」（通称：種子法）が廃止され、同年 12 月には水道を民間企業が運営できるような内容を含む「改正水道法」が成立した。他にも、学校教育を民間企業が運営できるようにする制度改正が考案されるなど、今後もその流れには歯止めがかからないのかもしれない。このような昨今の民営化における共通した特徴は、その対象となるものが種子・水・教育など営利目的では維持・管理が困難なものであり、かつ生活において必要不可欠なものであるということである。これらの多くは、経済学者の宇沢弘文氏が「社会的共通資本」として捉えたものであり、営利を目的とした事業に任せる場合には注意を要するものである。このような社会的共通資本の中には、鉄道も含まれており、国鉄が JR へと民営化されたことによる地域住民への影響は、少子高齢化が進んでいる現在において、より顕著に現れているといえるであろう。

このように、国民にほとんど詳細を知らされることなく、社会的共通資本を民間営利企業に委ねてもよい環境が整えられつつある。そこで今回は、そもそも市場経済とは何なのか、また市場経済では軽視されがちな公共性とは何なのか、を深めることによって、民営化とはどのようなことなのかを考える企画とした。松井彰彦氏には、市場の役割と「共・私・公」それぞれの機能について、また根本彰氏には図書館という観点から公共性について述べていただいた。少しでも民営化について考えるきっかけになれば幸いである。

(本誌編集委員 青木 美紗)